
仮面ライダーオーズ～大いなる欲望の力を宿す少女～

DEADPOOL ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーオーズく大いなる欲望の力を宿す少女く

【Nコード】

N1616V

【作者名】

DEADPOOL ZERO

【あらすじ】

この作品は仮面ライダーオーズを元にしていますが、原作とは色々違う部分が存在します。

つまりある意味リイマジです。嫌いであれば応援などよろしくお願いたします！

そして彼女はほぼ無欲となる（前書き）

名前がオーズ関係という事で執筆してみました。

そして彼女はほぼ無欲となる

800年前、この世界には欲望を糧とする怪人「グリード」が存在していた。鳥類系のアंक、昆虫系のウヴァ、猫科系のカザリ、重量系のガメル、水棲系のメズール、恐竜系のギル、甲殻類のクミヤ、爬虫類のガラの8体。

この怪人達は欲望から生まれる「セルメダル」とさらに強力な、生物達の力を凝縮した「コアメダル」によって形成されていた。

それぞれの欲望に従い己の力で暴れ回っていた怪人達はある時、突如として出現した一人の戦士によって封印される。

その戦士の名は・・・オーズ。グリード達の力の源、コアメダルで戦う戦士はグリード達を一人ずつ倒し封印すると、復活した時に備え自らも封印しその時代の人間達に警告した。

「この世界に、欲望が存在する限り奴らは蘇る。どんな形であろうとも・・・」

そして、時は流れ現代。受け継がれてきた伝説を元に、人々はある考えを持つようになる。「その欲望を一つに集めれば我々は神に近づける。」と・・・

この物語はそんな人類のとてつもなく巨大な欲望によって人生を狂わされた一人の少女の物語である。

「???」

「いや！離して！私は、私は人間のままでいたい！」

とある研究所、そこには一人の少女が捕らわれていた。彼女の名前

みずはらえいき
は水原映姫、普通の人より何でも良くできる彼女はある日突然謎の集団に誘拐され謎の実験の被験者へされてしまう。

「急げ。この少女ならば、今までの彼女達のようになるまい。」

「何なのよ！お願い、お家に返して！」

と必死に叫ぶが、口に布で栓をされると無理矢理チューブのたくさん接続された椅子に座らされる。そして手首と足首を鉄の輪で押さえつけられ、ついに彼女の全てを変える実験が行われる。

「会長の命令により、被験体へプロジェクト000レベル9。新たに開発に成功したコアメダル72枚とセルメダル10000枚を投入する。」

「ムグッ！・・・ウー！・・・ンーン！」

「・・・投入開始！」

その言葉と同時に彼女の両腕、両足、背中、肩、首に鋭い針が付いたチューブが勢いよく刺さり、どこかにつながれたタンクから赤、緑、黄、白、青、紫、黒、オレンジと銀の液体がどんどん彼女の中へ注入されていく。

「・・・ガハッ・・・グエッ・・・アアッ！」

凄まじい痛みと何かが彼女を襲い、瞳の色がめまぐるしく変わっていく。さらに髪の色も黒から虹色へと変化し、液体が見えなくなるのと同時にチューブや拘束具が外れ彼女は力なく倒れる。それでも無理矢理起こされると腕にナイフで斬り傷を負わされる。

「・・・・・・えっ？」

「おお。ついに実験は成功だ。おめでとう、水原映姫君。」

そこからは血ではなく、銀色のメダルが数枚出てきていた。それに驚きを隠せない映姫を尻目にその白服の男は謎の装置を渡す。

「・・・・・・今度は何？」

「これを使ってオーズになりたまえ。そうすれば君は神に近い存在となる。さあ・・・・・・やるんだ！」

映姫はほとんど感情が無い目でその装置を腰に付け、いつの間にか手の中にあった赤、黄、緑のメダルを入れ右腰のスキャナーでスキャンする。

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

その姿は人間らしいが人間では無い、頭には鷹を模した赤い緑の複眼のある装飾、虎のような鋭い爪がある黄色いスーツらしき物を纏った体、緑色のバッタの足のような模様の付いた長いニーソと靴の足。

それを見て周りの人間は歓喜した。

「やった！これで我々はまた一步、神へと近づいた！」

「これで、ようやく我らの目的が果たせるぞ！」

だが、映姫の顔からは何かが違う物が感じられた。そして科学者の

一人に近づくと右腕のクローを展開し・・・貫いた。

「ギャアアアア！」

「な、何をしている！やめろ！このままじゃ・・・グエッ！」

「ウワアアアア！」

科学者達はクローに貫かれ、強化されたパンチやキックで吹き飛ばされ、衝撃波で真つ二つにされた。その後、ニュースなどを通じてこの研究所の爆発事故と職員全員の死亡、ライドベントーとセルメダル100万枚と剣らしき物、缶らしき物が大量に盗まれた事が伝えられた。

そして映姫はその研究所の近くの森で呟いていた。

「私にはもう、生きるという欲しか無いのね。・・・まあ、いいわ。」

彼女にはもうほとんど欲望は無くなっていた。一つの生きるという欲望を除いて・・・しかし、彼女は知らない自分の他にも運命を狂わされた人物がいることを・・・

そして彼女はほぼ無欲となる（後書き）

原作とは色々設定とか違うのでご注意ください。

赤い羽根舞う鳥と雷放つ緑の昆虫（前書き）

これまでの三つの出来事！

一つ！人間達は神になるための実験を一人の少女に施す！

二つ！その少女、水原映姫は実験で得た力で研究所を破壊する！

そして三つ！使える物を全て奪い、映姫は近くの森林へ姿を消すのであった！

赤い羽根舞う鳥と雷放つ緑の昆虫

（深夜）

とある街、その路上を歩いている一人の少女。緑色の髪は後ろで二つになるよう纏められ、同じ色の瞳はつり上がっている。そんな彼女は何度も周りを見渡しては舌打ちをする。

「どうなってんのよ！どいつもこいつも大きな欲望がない！……こうなったのもあいつらのせいだわ。」

と叫びつつ、周りを再び見渡すと何かを見つけたように表情を変える。その目の前には大量の宝石が並べられた店をずっと眺めている男がいた。その男に近づくのと一枚の銀のメダルのような物を額に投入する。

「その欲望解放しろ！」

すると、男は苦しみだし中から白い包帯に巻かれた黒い怪物が這い出てくる。さらにその少女の姿もミニスカートと浴衣を組み合わせたような緑色の服を纏った姿へとなると、その怪物へ命令した。

「もっと大きな欲望や力を持っている奴を探してきなさい。」

それに怪物はうなずきながら、その店にあった宝石を全て吸収するのであった。

（森林）

そんな事があったなど知らず、謎の実験でほぼ無欲となった映姫は近くの湖から勢いよく飛び出すと抱えてあった魚を近くの木の枝に

刺して動きを止めると直ぐ様ずっと来ているセーラー服に着替える。そして手のひらから集めておいた木の枝に向かって炎を放ち魚を焼く。

「……もう人間じゃないのに味が分かるなんて不思議だわ。」

と呟きながら焼けた魚から食べていると、不意に動きが止まる。ゆっくりと後ろを見るが誰も居ない。そのまま気にせず食事に戻ると今度は空から赤い羽根が舞い落ちてくる。魚を一匹食べ終わると、その場から少し離れた次の瞬間、強烈な火炎弾が連続で飛んでくる。

「……何かしら？」

それをヒラリと躲すと今度は目の前から高速で何かが突っ込んでくるのを重力波を両手から打ち出し、その物体を重くし動きを止める。

「きゃあ！」

「どうかしら？通常の10倍重くなった感じは？」

「……やりますね。まさか、私が埋め込まれた鳥類系のコアの他に重量系のコアまで所持しているなんて。」

「……つまり、あなたも怪物になったの？」

ようやく立ち上がった少女は赤い浴衣のような服装で、赤い鳥のような髪にちよつとツンとした瞳を持っていた。映姫の言葉に首を振ると何かの本らしき物を取りだし、読み上げる。

「グリード。体を欲望の塊、セルメダルとコアメダルで形成する欲

望を糧とする古代の異形。私達はそのグリードの力を利用した神に近い存在へ昇華させる実験の被害者なんですよ。」

「そう。疑問が一つ晴れたわ。それであなたは何の用？」

「私は紅乃鳥^{こうのとり}メイ。一番最初にコアメダルの実験の被害にあった者です。目的は……」

「貴様らのコアを寄越せ……」

「……邪魔よ（です）。」

「グハア！」

そこまで言ったその時、近くの草原から白い包帯を巻いた黒い異形が飛び出して来る。更にその姿をカマキリのような姿へと変化させ二人へ襲いかかるが、メイの火炎と映姫の黄色い嵐によって大きく吹き飛ばされる。

「へえ。猫科系のコアまで持っているとは、驚きです。因みにあれはヤミー、欲望から生まれる怪物です。」

「……そう。でも、それだけじゃないわ。」

と言うと、腰に奇妙な物体を取り付けそれにある三つのくぼみへ3枚のコアを入れるとそれをスキャナーらしき物でスキャンする。

「変身。」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

「……まさか、あなたがオーズだったなんて驚きを通り越しています。」

「やめろ！その力は危険だ！」

「楽しんで助かるうとはしないわ。」

実験所を破壊した時と同じ姿となると両手のクローを展開し、ヤミ―を連続で斬り裂く。その傷からは大量のセルメダルが落ちてくる。それに対してベルトから2枚コアを取り出すと別のコアをセットしスキャンする。

『タカ！カマキリ！コンドル！』

カマキリの様な剣と赤いコンドルを模した足の爪を連続で振り回し、さつき以上にヤミ―を斬りつける。さらにコアを取りだし、別の物へ変えるとそれをスキャンする。

『クワガタ！ゴリラ！チーター！』

高速で攪乱しつつ、強烈なパンチを繰り返し頭からの電撃でヤミ―をほとんど立てなくするともう一度最初の姿に戻りもう一度スキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

「や、やめろ……」

赤、黄、緑のリングを通り抜け強烈な両足キックを食らわせるとヤ

ミーは悲鳴を上げること無く爆発。大量のセルメダルをばらまきながら消滅した。

「やりましたね。」

「いえ、まだよ。」

と変身を解かないで構えると木の上から、ヤミーを生み出した緑色の浴衣のような服装の少女が現れる。

「ようやく見つけたよ。オーズ！私の飢えを癒すためにあなたのコアを寄越しなさい！この私、緑林^{みどりばやし}ライに！」

叫ぶのと同時に彼女に頭から電撃が放たれ、近くの木を全て真つ二つにするのであった。

赤い羽根舞う鳥と雷放つ緑の昆虫（後書き）

カウント・ザ・メダル！現在、オーズが所持するメダルは！

鳥類系・・・9枚

昆虫系・・・9枚

猫科系・・・9枚

重量系・・・9枚

水棲系・・・9枚

甲殻類系・・・9枚

恐竜系・・・9枚

爬虫類系・・・9枚

黄色い風吹く猫とオレンジの砂輝く蛇（前書き）

黒のコアはオリジナルのフォームとなります。

黄色い風吹く猫とオレンジの砂輝く蛇

昆虫系のコアメダルを取り込んだであろう少女、緑林ライ。彼女は右腕に鎌を出現させるとオーズのままである映姫へ襲いかかる。

「虫にはこれでいきましょうか。」

ベルトの中央部分のコアを変えようと、そのままスキャンする。

『タカ！クジャク！バツタ！』

体の部分が赤い鳥を模した物となり、左腕に円盤状の武器「タジャスピナー」が出現すると同時にタジャスピナーから火炎弾を連射する。

「そんな物で、私が倒せるとでも！」

火炎弾を防ぎながら向かってきたライの鎌が直撃する前に映姫オーズが躲すと、ライの鎌が直撃した地面が大きく吹き飛ぶ。

「あら、凄まじいのね。羨ましいわ……」

「何よ、オーズでしかも私のコア以外のコア全部持ってる癖に！」

髪の毛の先端から緑色の電撃が放射され、映姫オーズへ連続で向かってくる。それをタジャスピナーで周りに受け流すのと同時に周りが爆発する。そして目の前を見るとすでにそこにはライの姿は見当たらなかったのであった。

「直情型という性格ですね。短気で荒っぽい、まさにストレートど真ん中。」

木の上で見守っていたメイが翼を広げゆっくり降りてきながら説明する。映姫も変身を解き、湖の近くまで移動しながらただだまってそのつぶやきを聞くだけであった。その様子を木の陰からのぞいていた黄色いショートヘアの少女は風と共に消えた。

（街）

人が歩く昼の街、その中をローラースケートでゆっくり滑る数時間前まで映姫達の様子を見ていた黄色いショートヘアの少女。人混みの中をゆっくりと滑っていく少女はどこかのもう使われていない小さい屋敷の中へ入っていく。

「……もう、出てきたらどうかニヤ？」

そう言って、屋敷の中を見渡すとどこからかオレンジ色に輝く砂が出てきて、人の形を作る。それはオレンジ色のお嬢様風の服に縦巻きロールの肘ぐらいまで伸びたオレンジの髪とタレ目の少女は日傘を差すと答えるように言った。

「また帰って来て、何か理由でもあるのかしら？」

「別に理由はないニヤ♪」

「ハア……私達はもう人間とは遠くかけ離れた存在であるのによくそう気楽でいられますわね、風見リン。」

「私は私ニヤ♪そういうあんたもあまり気にしてニヤさそうニヤ♪……えっと、その、何て言っただけかニヤ？」

「亀蛇ミサ、ですわ。」

「教えてくれてありがとニャ♪」

「おととも教えましたわ・・・」

黄色いメイド服に黄色いショートヘアと猫目で猫耳と尻尾を付けている少女、風見リンと亀蛇^{かめだ}ミサは何故か一緒に住んでいる。そして彼女達も猫科系コアと爬虫類系のコアをそれぞれ宿している存在なのである。因みにミサはリンの性格にいつも苦勞するのであった。

「まったく・・・そういえば、あなたヤミーを宿してきたのですよ？」

「もちろんニャ♪やる時はやるニャ♪」

「ならば、よしとしますわ。」

そして二人は奥の部屋へと入っていくのであった。

く雑木林く

場面は変わり、再び映姫のいる雑木林。映姫は、メイのコアや実験の事を黙って聞いているのだがあまり関係ないように聞き流していた（しっかりと覚えてはいるが）。

「ですから、あの人は私達を実験台にして人々を神に近い存在へ進化させる方法を色々と試していた・・・と聞いてます？」

「覚えてはいるわ。」

「そうですか。まあ、その実験体の中であなたは私とあのライって人を加えた9人の実験のデータを元にしたさらに強力な実験を受けた存在です。」

「……そう、それより食べる？」

「もらいます。」

焼いた魚を差し出すと、メイはそれを受け取り味わいながら食べる。それを見ながら映姫も食べようとしたその時、映姫とメイは何かを感じる。

「まったくヤミーは色々邪魔するのが好きなようね。」

「そうですね。」

映姫は近くに停めてあるバイク、ライドベントーに乗りメイは赤い翼を広げそのヤミーの反応のした場所へ向かうのであった。

く街く

その頃、街ではリンが誰かにセルメダルを入れて誕生させたと思われるネコヤミーが暴れ回っていた。

「もっと、もっと喰わせろ！」

と叫びながら、街に向かって光弾を放ち暴れる。その様子をビルの陰から見守るリンとミサは互いに話し合っていた。

「ニヤハハ♪大成功ニヤ♪」

「ええ、そうね。それより何か変な存在を二つ感じるわね……」
と見守っているその時、空中から火炎弾がネコヤミーを吹き飛ばす。
さらに倒れた所へライドベントーが突撃し、はね飛ばす。

「ニャ!？」

「あれは……何？」

勿論、火炎弾はメイが放ちライドベントーで突撃したのは映姫である。その映姫はすでにオーズドライバーとコアメダルを装備している。

「さて、補充の時間よ。」

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タトバ!タ・ト・バ!』

「これを使ってください。」

メイは着地すると、水色の剣を渡す。それは映姫が盗み出したオーズ専用武器「メダジャリバー」である。

「分かったわ。」

そのまま、片手に持ちつつネコヤミーへ挑む映姫オーズ。メイは近くの高い木に飛び移り、観察する。そしてまずはネコヤミーを一閃。しかしその厚い脂肪に防がれる。しかも映姫オーズはあることに気づく。

「中に人が居るのね。・・・やっかいだわ。」

ネコヤミーの攻撃を躲しながら、一閃を放っていくが全く効かずいくらか攻撃を食らってしまう。そのため、映姫オーズはコアを二枚変える。

『タカ！ゴリラ！チーター！』

腕力が強いゴリラアームと俊敏性のあるチーターレッグにチェンジするとそのまま高速で攪乱しながら強力なパンチを放っていく。しかしそれでもセルメダルが何枚か飛び出すだけであまりダメージは与えられない。

「ふう、困ったわ・・・コンボは使ってもいいけど、被害が大きいいし・・・そうだわ、あれを使えばいいんだわ。」

何かを思いついたのか黒いコアを取り出すと、それをドライバーに入れスキャンする。

『サソリ！カニ！チーター！』

黒いサソリを模した白い複眼。背中にカニの足を模した二本の剣を背負い巨大な鋏のついたアームになるとまずはサソリの尾のような鞭を頭から伸ばしネコヤミーの体内へ突き入れる。そしてそのまま何かに巻き付けたらしく勢いよく引っ張ると中から少し太めの男性が出てくる。そして無事なことを確認すると、背中の黒い双剣「カニセイバー」でどんどん斬りつける。

「嘘ニャ！あのネコヤミーの脂肪を斬り裂くニャンて！」

「落ち着きなさい。（しかし、聞いた話ではあの黒いコアは数年前
実験体に取り込ませたとき凶暴化して失敗したと聞きましたが・・・
・）」

とリンとミサがそれぞれ考えているうちに映姫オーズは必殺技を発
動した。

『スキヤニングチャージ！』

まずは相手の攻撃を高速でよけつつカニセイバーで斬りつける。そ
して弱ったところをサソリヘッドの鞭で縛り毒を注入しながら空中
へ放り投げカニアームを展開し闇のエネルギーを貯め落ちてきたと
ころにちょうどアームではさみ爆発させた。

「これが黒のコアの力ですか・・・」

とメイが感心しているとどこからか、高速で近づく影が映姫オーズ
へ迫る。それに気づいた映姫オーズはカニセイバーを振ると何かに
ぶつかり、確認するとそこにいたのは鉤爪を展開し襲ってきた黄色
い浴衣のような服装のリンであった。

（またこのパターン・・・）

映姫オーズは災難が多いと思うのであった。

黄色い風吹く猫とオレンジの砂輝く蛇（後書き）

次回はコンボのどれかが出ると思います。

変身！青き水の女王！（前書き）

今回、ついにコンボ登場です。

変身！青き水の女王！

ヤミーを倒し終えた映姫は突如襲いかかってきたヤミーを誕生させた猫科系のコアを持つリンと戦っていた。因みに二人とも、高速に移動しながら戦っているため普通の人々には何が起きたのか分からなかった。

「よくも私のヤミーをセルに変えてくれたのニャ！許さないニャ！」
「……本当に猫だわ。」

カニセイバーと鉤爪をぶつけ合い、二人のスピードと戦いはさらに加速していく。そしてどこかの川らしき所まで来ると立ち止まり、再びカニセイバーと鉤爪をぶつけ合う。しかし、オーズのカニアームは意外と巨大なため振りが遅くなりリンの攻撃をいくらか受け、吹き飛ばされてしまう。

「ニャハハ♪私のヤミーを倒した報いを受けるニャ♪」

「……残念だけど、たった今あなたを逆に追い詰める方法が分かったわ。」

「ニャ？」

何とか立ち上がった映姫は3枚のコア全てを取り出すと、青いコア2枚と黒いコア1枚を一気にセットしスキャンした。

『シャチ！ウナギ！エビ！』

そしてオーズの姿は先程とは違い、シャチのような黄色い複眼の頭、青いラインが入ったウナギのマークがついたボディ、そして黒いエビの甲羅のような装甲をつけた灰色と黒の中間のような色の足という姿になると足からヒレのような物を出し、勢いよく水流を噴射しリンへ向かってジャンプ。その勢いで水を纏った両足蹴りをおみまにする。

「ニャアアアアアア!？」

「……ほら、猫って雨とか嫌いでしょ? ……だから、このまま押し切らせてもらおうわ。」

とずぶ濡れになり、体を震わせているリンに問いかけながらオーズは再び両足から水流を放ちリンの方向へ飛ぶと、連続蹴りを放ちさらにずぶ濡れにする。さすがに、効いてきたのかリンはほとんど動けなくなっていた。

「ま、まずいニャ……体がもう動かニャいニャ……」

「……なら、とどめよ。」

そしてスキヤナーを持ち、必殺技を放とうとした時突如として大蛇の形をした砂の塊がオーズを川へ吹き飛ばす。さらに口から砂の砲弾を放ち、オーズを攻撃していく。

「……ニャア、やっぱりミサだニャ」

「全く、世話のかかる子猫さんですわ。」

オーズが戦いに気を取られている間に、ミサは砂の形態でリンに近

づきそのままリンを取り込んでどこかへ消えるのであった。そしてオーズはそれに気づくことなく大蛇と戦い続けたが、不定形な存在のために斬る事も衝撃を与えることも出来ず苦戦していた。

「……やるわね。このままじゃやられるかしら？」

そして大蛇が噛みつきこうとした時、どこからか火炎弾が飛んできて大蛇の一部を吹き飛ばす。もちろんそれはオーズを追いかけてきたメイである。赤い羽根を散らしながら少し離れた所に立つと、オーズに向かって叫ぶ。

「映姫さん。置いてけぼりにされたのはちょっとあれですが、特別にあれを倒す方法を教えてあげます。」

「……あら、嬉しいわね。」

「では砂を泥にするにはどうすればいいでしょう？」

それを聞いた途端、オーズは復活しかけた大蛇に左腕から水流を勢いよく放つ。すると再び大蛇は吹き飛ばされ、しかも水流の当たった部分は茶色くなる。それを見て確信したオーズは黒のコアを抜き、3枚目の青のコアを入れスキャンする。

『シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ！シャシャシャウタ！』

そして体中から水しぶきを放ち、新たなコンボの姿を現す。シャチを模した海中でのソナーの役割を持つシャチヘッド、電気ムチ「ボルタームウィップ」を自在に操るウナギアーム、タコのようにいかなる場所にも吸い付くタコレッグを持つ水のコンボ形態「シャウタコンボ」となるとメイは感心したようにうなずき、オーズも手を

握りしめるようにしながら大蛇の攻撃を液状化しかわすと大蛇の顔部分にタコレッグによる連続蹴りを放つ。さらに頭と両腕からさつき以上に強力な水流を放つと、一気に大蛇を茶色くし泥のように固め地面に着地、そのままベルトを再びスキャンする。

『スキヤニングチャージ!』

そして液状化し、飛び上がるとボルタムウィップでしびれさせながら持ち上げ足をドリル状に変化させると高速回転させながら大蛇を貫く必殺技「オクトパニッシュ」を放ち大蛇を粉碎、その破片は本当の泥とかし川の中へ落ちていった。

「……やっぱり疲れるわ。」

「まあ、コンボですから。」

フラフラな状態で変身を解いた映姫に肩を貸しながら、メイは飛び立つ。その様子を影から見守る紫色の浴衣を着た大人っぽい少女がいたことに気づかずに……

変身！青き水の女王！（後書き）

シャウタコンボの理由はテレビでの活躍回数が少ない気がしたからです。因みにオーズの姿は原作とは少し違うため、知りたかったらようつべでOOO comboと調べてみてください。

黒幕と紫の妖艶少女（前書き）

今回、映姫達にあの実験をほどこした人物と紫のコアの少女が出現します。

黒幕と紫の妖艶少女

どこかの巨大な会社らしきビルの中、その中を進んでいくメイ達とはまた違う浴衣を着ている女の子にしては大人っぽく妖艶な雰囲気を持つ瞳と髪が紫色の膝辺りまで伸び、ウェーブを掛けているという姿の彼女はエレベーターで一気に最上階へ向かう。その最上階にはいくつものセルメダルと、カラフルな布や家具や装飾に飾られた物が大量にあった。そして少女の目の前にはクッキーを大量に作っている露出の多いドレスに身を包んだ、緑の瞳で肩より少し下くらいで切り揃えられている髪を赤、黄、緑に染めたドレスからはみ出してしまうような胸、キュツと引き締まった腰、大きく柔らかそうなお尻の魅力的な女性がそこには居た。

「いらっしゃい、罪乃ユカリちゃん。」

「我は呼ばれたから来たただがの、こうがみよむ鴻上欲無よ。」

「連れないわねーまあいいわ。それより研究所を脱走した最後の実験体はどうかしら？」

「初めてにしてはよくやるがの。まだまだの様子じゃ。」

欲無と呼ばれた女性とユカリはお互いに会話しながら、大量に用意されたクッキーを食していく。ユカリは結構お気に入りの様で微笑みながら食べている。

「それで？要件とは何かの？」

「そうそう、それなんだけどー」

それから数十分後、ユカリは紫を多めにした服装でその大きな会社・・・表向きはクッキー企業世界？1でその裏ではかつて世界を救ったオーズの力を手に入れようとする巨大組織「鴻上コーポレーション」を見上げ呟いた。

「存在しないコアを使った新たなグリッド・・・楽しみにしておるぞ。」

彼女はそのまま髪をプテラノドンのような翼に変化させ、人目に付かない所から勢いよく空へと飛び出していった。それを欲無は笑顔でクッキーを作りながら見送っていた・・・その机の上に見たことも無い新たなコアメダルを置いたまま。

（雑木林）

それから数時間後のお昼頃真っ盛りの森の中で、映姫とメイはそれぞれ木の影と木の枝の上で睡眠中であつたのだが・・・

「起きるのだ〜！」

突如その木を大きな衝撃が襲い、二人はその倒れた木から降ってきた、木の葉を全身に浴び、木の葉まみれになって寝ぼけた状態で起きた。その目の前には銀色の髪を全部、象の鼻のように纏めてポニーテールにした鈍い銀色のゆったりとした瞳の少女は眩しいくらいの笑顔で立っていた。

「・・・誰よ、貴重な睡眠時間を奪ったの？」

「目の前にいる、確か重量系の・・・」

「銀乃角メルなのだ〜よろしくなのだ〜」

「「ハア……（緊張感なさ過ぎね／ですね）」」

あまりに緊張感の無い、天然みたいな性格のメルにあきればてため息を同時につく映姫とメイであった……。すると三人の頭の中にメダルの増える音が聞こえてくる。ヤミー出現の合図である。

「どうやらで「出番なのだ〜！」……。ハア、やってらんないわ。」

「頑張りましょう、映姫さん。彼女の能力は結構役立ちます。」

そして映姫はライドベンター、メイは赤い翼で羽ばたき、メルはそのメイの足に飛びつき墜落しそうになる。しかし重力操作で軽くなり高速で三人は現場へと向かった。

〜廃工場〜

そのヤミーが出現したのは廃工場。そこにいたのは、柄の悪い不良達だったのだが全員ズタボロにされていた。そしてその不良達の目の前には全身紫色で、龍を模した姿の「ドラゴンヤミー」と浴衣姿のユカリが紫色の番傘と扇子を持って妖艶な笑みを浮かべていた。

「お主らに大事な物を壊された者達のうらみじゃ。精々反省するこ
とじゃの……。来たかの？」

そのユカリが扇子を閉じ、工場の入り口の方を見るとオーズドライバーを腰に装着した映姫、浴衣姿のメイとメルがいた。そして映姫は自らの体内から取り出した2枚の赤いコアと1枚のサソリやカニ、エビとは違う真っ黒のコアをセットし、オースキャナーでスキャン

し叫んだ。

「……変身！」

『タカ！クジャク！ゾウ！』

スキャンして少し間を開けてから叫んだ言葉と共に電子音声の流れその姿を変える。赤いタカのような仮面の髪当て、赤い鳥のような装飾を付けたボディ、銀色のラインを入れた重そうな靴をロングスカートで隠し水色のメダジャリバーと左腕に赤いガンドレッドの様な武器「タジャスピナー」を装備しオーズはドラゴンヤミーへと向かっていく。

そのドラゴンヤミーの目の前にユカリは立つとその番傘を広げ、振り下ろされたメダジャリバーの斬撃を防ぐ。そして扇子をしまい、トリケラトプスを模した長い紫色の槍を振り回し吹き飛ばす。

「ここは我に任せお主は使命を果たせ。壊されし大切な物から生まれし龍よ。」

「……かたじけない！」

ユカリの言葉に応えたドラゴンヤミーは廃工場の天井を突き破って逃走した。それを追いかけようとするメイとメルに向けて番傘から氷柱を放つユカリ。それはメルが重力波で落とし、そのままメイとメルはオーズに加勢すると三人連続で攻撃を加えていく。しかし、その攻撃全てをかわしティラノサウルスを模した斧でメルを吹き飛ばしメイを冷気で弱らせ二人を圧倒、さらにオーズと何回も鏢競り合い、機材などを吹き飛ばしていきそのまま近くの柱にオーズを叩き付け、冷気を口から吐き顔から肩辺りを出すように凍らせる。

「くっ……さすがは紫のコア、凄まじい力です！」

「卑怯なのだ〜！」

それを見ていたメイとメルは同時に火炎と重力波を放つが、それ以上で強力な冷気とぶつかり合いその爆発の衝撃で吹き飛ばされる。

「……あなた、私の何が目的よ。」

「うむ、そうじゃった……ちと恥ずかしいが我慢せい。」

「はっ？」

それを見ていられなかったオーズが叫ぶとユカリはピタリと攻撃をやめ、そのまま扇子を広げながら妖艶の笑みを浮かべつつオーズの顎を持つと……口づけを、しかも深い方を突然するのであった。

「ングッ!? ンンッ! ンンンンンンンンッ！」

「ンッ……ンンッ……プハッ。……中々の美味じゃったぞ。」

二人の舌が糸を引いており、オーズはあまりの突然の出来事と行為の恥ずかしさに顔を真っ赤にしながら変身を解いてしまう。ユカリは舌なめずりをしながら映姫の耳元で呟いた。

「コアのリミッターを少し、ほどいてやったぞ。まあ、紫のコアだけじゃがの〜我のヤミーは強い、止めれる物なら止めてみせい。」

そのままユカリは吹雪と共に消えていった。ずっと動かないままの

映姫を気にしたのか、メイとメルが近寄り話し掛ける。

「大丈夫ですか？ 映姫さん？」

「おいしい。映姫くしっかりするのだ？」

映姫は答えることなくフラフラとライドベントーへと向かい、メイとメルお互いに顔を合わせ不思議がりながらついて行く。そんな彼女の中で紫のコアが強く輝いた・・・

黒幕と紫の妖艶少女（後書き）

プロテイヤは・・・まだでございます。

新たなる力と炎の不死鳥（前書き）

久しぶりの投稿です。

新たな力と炎の不死鳥

ファーストキスを奪われた映姫はその奪われた日からずっと、心ここにあらずという状態だった。メイやメルが何度も呼びかけるが、それにも全く答えず二人は色々と心配になる。

「映姫さん、全く動きませんね。」

「むゝ調子が狂うのだゝ」

「映姫さんと少ししか居ないのに、ずっと居たような言い方はしないでください。」

「実は居たのだゝずっと地中から見てたのだゝでも寝過ぎて出るタイミングを逃していたのだゝ」

メルの衝撃発言に、メイはため息をつきながら頭を抱えていると木の影にいた映姫がフラフラと立ち上がり、どこかへとライドベンターで走り出して行った。メイとメルはそれに気づき、急いで追いかけた。

ゝ街中ゝ

どこかの街中ではあのドラゴンヤミーが、両手から紫色の光弾を放ち街のビルなどをどんどん破壊していく。それをユカリは妖艶な笑みを浮かべながら、観察していた。

「いいのゝ大切な物を壊された悲しみ、怒り、憎しみがあ奴を強くしていく。人間達は己の過ちで己を滅ぼすのじやのうゝ」

そしてユカリが翼をプテラノドン状に変化させて飛び立とうとした瞬間、どこからかバイクの走る音が聞こえ、その方向を見ると映姫達が戦闘準備を整えている状態でやって来ていた。

「・・・・変身。」

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！』

映姫はタトバコンボに変身すると、ゆっくり歩きながらメダジャリバーを構え、さらに頭のタカヘッドの緑色の複眼を紫色に輝かせると、左手に紫色の刃と恐竜のような顔が特徴の片手斧「メダグブリュー」をどこからともなく出現させる。それと同時に、左手が紫色の強固な装甲の腕に一瞬変化するが、すぐ元のトラアームに戻り、映姫もそれを気にすることなくドラゴンヤミーの数歩手前まで来ると勢いよく両手の武器を振り下ろす。

「ぐおっ！？な、何だこのパワーは！？」

「・・・・新たな力よ。」

どこか冷たい雰囲気の中、映姫は一言だけ呟くと、何度も何度も防御や反撃を許さない程に両手に持った武器を振り下ろしていく。そしてドラゴンヤミーが再び逃亡しようとするのと同じタイミングでメダルを全て赤い物に変え、スキャンする。

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！』

頭のタカヘッドが、大きく赤い複眼の形が変化したタカヘッド・ブレイブ、胴体が赤い翼状の装甲が特徴のクジャクアーム、足が黄色い鋭い爪の付いた赤いソックスのようなコンドルアームの鳥類コン

ボ「タジャドルコンボ」に変身すると周りに炎をまき散らし、髪と瞳を赤く染めると背中中のクジャクウイングを展開し、空中にいたドラゴンヤミーを捕まえ地面に無理矢理落とすと、さらに高く飛翔し宇宙と空の境目辺りまで来ると強化された視覚で、地面にめり込んでいるドラゴンヤミーを捉え再びベルトのメダルをスキャンする。

『スキヤニングチャージ！』

そして一気にドラゴンヤミー目掛けてコンドルアームを鳥の鋭い爪足状態に展開し、空気との摩擦の炎とメダルの力で纏わせた炎を両足に纏わせた強烈な必殺技「プロミネンスドロップ」を発動し、漸く立ち上がったドラゴンヤミーに直撃させ、そのまま爆発させた。

「……あら？私ったらいつの間に……」

変身を解いた映姫はいつもの様に髪を撫で、既にヤミーを倒していた事に疑問を浮かべながら、今の戦いに驚愕したままのメイとメルの元へと合流するのであった……

（王への……いや女王への階段を一段上ったかの……）

その様子を見終えたユカリは再び髪をプテラノドン状に変化させ、今度こそ空へと飛び立っていった。そしてその頃、鴻上コーポレーションの社長室では……

『社長、こいつの調整終わりましたよ。』

「うん。ありがとね♪さて、あなた達二人には、この二つを使って、あの実験体達を色々やってもらおうかな？」

欲無が一人の科学者らしき男と話し合った後、二つのベルトらしき物の映像を青い髪と瞳の少女と黒い髪と瞳の少女に見せているのであった。

新たなる力と炎の不死鳥（後書き）

感想やオリジナルコアなどを待っています。

登場、新たなる戦士（前書き）

今回、オリジナル戦士登場です。

登場、新たなる戦士

ある日の事、多数の人が行き交う中で、青く長い髪を右側にサイドテールとして纏めた少女と、黒く長い髪を反対に左側にサイドテールとして纏めた黒い瞳の少女は手を繋ぎながら街中を歩いていた。

「今日も良い天気・・・ね？ エリサちゃん。」

「・・・（コクッ）」

青い髪の女の子の名前は海原アイナ。黒い髪の女の子の名前は黒井エリサ。二人とも普通の女の子に見えて、鴻上コーポレーションの実験でグリード化した者達の二人なのである。因みに二人とも、姉妹とかでは無いが何故か姉妹として生活していた。その理由は・・・

（この子は何故か、人前では全く話さなくなってる・・・社長さんの言っていた通り、かつて暴走した事が原因なの？）

「・・・？」

「ああ、大丈夫よ。ただの考え事だから・・・」

その時、二人は沢山のメダルが落ちてくる感覚に襲われる。アイナはエリサを守るように抱きしめながら、その感覚の発生場所を辿る。そして探知したその場所には・・・

「・・・！オーズ？この感覚は、オーズなの？」

「・・・・・・・・・・！」

「あっ！エリサちゃん！」

エリサはオーズという単語を聞いた途端に走り出し、どんどん人をかき分けていく。それを見ながらアイナは仕方ないという表情をしながら、近くの販売機の様な状態のライドベーターにセルメダルを投入し、バイク形態へと変え、そのまま乗り込むとエリサの走っていった方向へと向かっていった。

一方の映姫達は、街へと買い出しに来ていたのだが、偶然にもライ、ミサ、リンに遭遇、ミサとリンは穏便に対応としたのだが、見た瞬間にキレたライが分割したセルを何枚も放り投げ、白ヤミーより下の屑ヤミーを何体も生みだし、そのまま戦闘へと発展していったのであった。

「オーズも、あんたらも、皆消えればいいのよ！」

ライは何にでもキレてるんじゃないのか、と戦闘を担当したメイとミサは思う。ライの放つ電撃をミサが砂の壁で防ぎ、それで姿が隠れている間に火炎弾を放つメイ。その火炎弾を鎌で薙ぎ払ったライの怒りは最高潮に達する。

「いいかげんに・・・・・・・・消・え・な・さ・い・よ！」

その怒りに反応するように、屑ヤミーとセルが集まり、巨大なクワガタとカブトムシが合わさったような巨大な虫のヤミーが生まれる。

「ニャ・・・・・・・・ニャにあれ？」

「怒りのゝ暴走ゝ？」

「そのようね。」

リン、メル、映姫オーズが呟いてると、虫ヤミーは叫び声を上げ、全員に向かって緑色の電撃を纏って突進してくる。それをそれぞれ回避したが、何とその後ろに一人の女の子、先程走ってきたエリサがそこに立っていた。

「てめえも邪魔すんのかああああああああっ！」

怒りに身を任せ、虫ヤミーを突進させるライ。そしてヤミーの鋭い角がエリサに直撃・・・しなかった。そのエリサの前に大きな水の壁が生み出されており、その壁の後ろにアイナが居た。

「全く、グリード達が揃いに揃って何やってるのかしら？」

「文句でも・・・あんの！」

虫ヤミーと共に電撃を放つライだが、その電撃を今度は浴衣姿のエリサが闇の波動で押し返す。そしてエリサは大きく息を吸うと呟きだした。

「オーズ・・・私のコア・・・ちようだい・・・」

「漸く喋ってくれたわね♪偉い偉い。」

「えへへ・・・／／／／」

アイナに頭を撫でられたエリサは顔を赤く染める。それに啞然とし

てる映姫、メイ、メルとは別に、ミサとリンはそれぞれ、その場から逃亡する。

（こういう時、何かありそうで恐いですわ。）

（逃げるが勝ちニャ♪）

そんな事に気づいていない映姫達の目の前で、しっかりと並び直したアイナとエリサは浴衣姿のまま、巨大ヤミーを見つめながらどこからか、オーズドライバーとは違う形をしたベルトを腰に同時に巻き付ける。そして一枚のセルメダルを取り出すと、空中に向かって弾きそれを掴み呟く。

「変身。」

『『カポーン！』』

そして緑と青の球体状のフィールドが二人を包み込み、その中で出現した球体が二人の体に装甲を装着していく。そしてフィールドが晴れるとそこには二人の戦士が立っていた。

黒いスーツ、銀の装甲、ダイヤモンドホワイトと緑に輝くオーブ、赤い複眼が特徴の戦士バース。それとは反対に白いスーツ、金の装甲、クリアイエローと青に輝くオーブ、左腕に取り付けられたタジヤスピナーの様な武器、青い複眼が特徴の戦士デーズ。

「さて、稼ぎましようか？」

「うん・・・」

二人は両腕で、専用武器「バースバスター」と「デーズキャノン」

を構えるのであった。果たして二人の実力やいかに！？

登場、新たなる戦士（後書き）

次回はバースとデイズの初戦闘です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1616v/>

仮面ライダーオーズ～大いなる欲望の力を宿す少女～

2011年11月15日12時43分発行